

# 「総合的な学習の時間」学習指導案

3年3組 在籍36名  
指導者 笹原 克彦

## 1 題材名 世界一おいしい蜷川焼きをつくろう

## 2 題材の目標

おいしい蜷川焼きを作るために必要な材料、道具や作り方などについて問題を見つけ、それを解決していくことによって、必要な情報を集める方法を工夫し、取捨選択しながら、自分なりの考えをまとめていくことができ、主体的に学習する楽しさを味わうことができる。

蜷川焼きについて自分なりの方法で調べたり、グループで協力しながら調理したりすることによって、友達や地域の人々と共に生きている自分に気づき、進んでかかわり合うことができる。

## 3 題材について

社会科の学習で、学校から家までの道のりや学校のまわりの地域について、学習したところ、「あの辺に店があったよ」「広い道路を横断してくるよ」と、漠然としたイメージはつかんでいるが、具体的に、どのような施設があり、それがどのように役立ち、そこでどのような人が働いているかに、思い至っている子供は少ない。また、遊び方の種類や行動範囲の狭さから、地域の人々とかかわり合う機会が少ない。

3年生の子供たちにとっての総合的な学習は、生活科とのつながりから、くらしと結び付き、食べる、作る、調べる、かかわり合うなど、体験のある学習活動を含んだテーマであることが望ましいと考える。また、社会科では、自分たちの学校のまわりの様子を、見学を通して体験的にとらえる学習が始まっており、教科で得た既習の経験を生かしながら、地域の人々とかかわり合う学習が望ましいと考えた。

そこで、「地域に取材し、材料を集めて、世界一おいしい蜷川焼きをつくろう」という題材を設定した。「蜷川焼き」とは、自分たちで工夫して作るオリジナルなお好み焼きのことである。単にお好み焼きではなく「蜷川焼き」と名付けることによって、自分たち自身が一番おいしいと感じるお好み焼きにしたいという意識を、高めることができるのではないかと考えた。おいしいお好み焼きを作るためには、材料の選択、調理の方法など、条件がたくさんあり、その条件は複合している。それぞれの視点で、自分の考えたおいしい「蜷川焼き」について調べ、実際に調理することによって、子供たちは自分なりのおいしい「蜷川焼き」に対するイメージを高め、実現していくことができると考える。

また、調理にあたっては、子供たちの「こんな蜷川焼きにしたい」という願いに合わせたグループを編成し、それぞれのグループで材料の選び方や、調理の仕方を工夫していく。よりおいしい「蜷川焼き」を工夫していく過程を通して、友達とかかわり合い、自分の思いと相手の思いを絡み合わせながら、互いを理解し合う力が育っていくことを期待する。

以上の点をふまえ、この題材を通して、子供たちが次のような力を身に付けることを期待する。

#### 【問題解決能力】

- ・ 自分なりの問題を見つける力
- ・ 問題解決のための情報を収集する力
- ・ 問題解決に必要な情報を取捨選択する力
- ・ 取材にあたって何をどのように聞くかを考える力
- ・ 問題を解決するために粘り強く取り組む力

#### 【コミュニケーション能力】

- ・ 友達や地域の人とコミュニケーションする力
- ・ 自分の考えを人に話すためにまとめる力
- ・ 自分の考えと友達の考えとを調整する力
- ・ 自分の考えをさまざまな方法で表現、発信する力
- ・ 相手の気持ち理解しようとする力

お好み焼きは、家庭でも作ることがあり、家族からのアドバイスを受けることができる。また、地域内にも、お好み焼き屋が何店かあり、焼き方や材料の選び方について取材に行くことも可能である。材料を手に入れるために、近くの肉店やスーパーマーケットに買い物に行ったり、野菜を育てている近所の家から材料をいただいたりという経験も起こりうるであろう。これらの活動を通して、地域にどのような人が住み、どのような店があり、どのような人々がそこで働いているかを見つめるきっかけとなればよいと考える。おいしい「蜷川焼き」について調べる過程を通して、地域に住む様々な人々と触れあう経験ができることを期待したい。

本題材では、自分たちが、納得できる「蜷川焼き」を作り上げるために、調べ活動を行ったり、何度も調理をしたりするなど、体験的な活動を多く取り入れる。食べることは人が生きる上で、大切な営みであるし、人は豊かな食を求めることには、意欲的になれる。よりおいしい「蜷川焼き」を、体験的な活動を取り入れながら追究していくことによって、食について考え方を広げるきっかけになり、楽しみながらねばり強く学習に取り組むことができるのではないかと考える。また、家の人や地域の人にも食べてもらう活動に発展したり、教科の学習においても蜷川から富山市へと見方を広げながら問題解決に取り組んだり、といった活動の広がりが期待できると考える。

## 4 学校課題との関連

### (1) 学校課題との関連

#### 教材提示の工夫

3年3組の子供たちは、自分が面白いと感じたことに対しては、大変熱心に問題解決に取り組む。しかし、その意欲が長続きしなかったり、問題解決の途中で障害にあうとあきらめてしまうという姿がしばしば見られた。

そういう子供たちがお好み焼きについて意欲的に調べるためには、「おいしいお好み焼きを作りたい」と、子供たち自身が願うことが大切である。その願いが強ければ強いほど、必要感をもって学習に取り組むからである。

そこで、本単元では、子供たちの目の前で、実際にお好み焼きを焼いて見せ、それを一口ずつ味わうことによって、「自分たちでも作ってみたい」という気持ちが高まると考える。実際に作ってみせることによって、ビデオでは感じ取れない臨場感(具をかき混ぜるときやお好み焼きを裏返すときの手つき、肉が焼けるときはじける油の音、ソースが鉄板にたれたときの音や焼けるときの匂い、鉄板から伝わる熱気など)が伝わり、インパクトのある教材提示になると考える。そのお好み焼きを、ほんの一口だけ口にす

ることによって子供たちは、「もっと食べてみたい」「自分もおいしいお好み焼きを作りたい」という気持ちを高めるであろう。目の前でお好み焼きができあがっていく様子を見ることによって、実際に自分で作るときにどのようにしたらよいかを考えるヒントにすることもできる。

その後、子供たちが必要だと考える材料を自分で用意し、自分たちなりに作り方を調べて実際に作ってみる。あまり調理の経験がない子供たちにとって、具の分量や焼き加減などの調整は難しいことであろう。教師が作ったお好み焼きと自分たちが作ったお好み焼きとでは、味や見た目に大きなちがいがあることが予想される。そのちがいがから、どうしたらおいしいお好み焼きを作ることができるのか、さらに調べてみたいという意欲が高まるのではないかと考える。

#### 体験の繰り返しを経験へ

本題材では、体験を取り入れることを重視するが、単に体験するだけでは、それをくらしと結びつけ生かしていこうとすることにはつながらない。体験を何度も積み、それでよかったかを振り返ることによって、初めてよりよくくらしとする生きた経験へと高めることができると考える。

本題材では、教師が作ったお好み焼きを口にし、自分たちでも作ってみる体験から、もっとおいしいお好み焼きを作りたいという願いが、高まることを期待している。その願いを基に、自分なりにおいしい「蜷川焼き」の作り方を工夫し、材料を集めて、再度作ってみる。お互いの味を評価し合うことによって、もう一度作り方や材料選びの工夫を見直し、さらにもう一度、おいしい「蜷川焼き」づくりに取り組んでみる。自分の思いにあった「蜷川焼き」について調べ、試作し、評価し合うという活動を何度かフィードバックし、体験を積みながら自分の取組みを見直すことによって、自分なりの考えを見つけ、それを実現しようとする力が高まるのではないかと考える。

また、よりおいしい「蜷川焼き」を作りたいという、切実感を高めるために、作ったお好み焼きを互いに評価し合う場を設け、どのような工夫をしたらおいしいと感じてもらえるかを客観的に見つめ直す機会としたい。

#### メディアを活用した情報の収集

本題材では、おいしい蜷川焼きに仕上げるために、調べ活動を行う。調べ学習にあたっては、インターネットや図書館の資料を活用したり、取材に出かけたりするなど、子供たちなりの取組みを認めるとともに、うまく調べ方を見つけられない子供に対しては、他の子供がどのような調べ方をしているか聞くよう助言するなど、自分が知りたいことを見つけられるよう支援していく。

その際に、インターネットを活用して調べられるように、検索方法を提示したり、リンク集を用意したりする。また、VTR視聴コーナーを設け、お好み焼き店で取材してきたビデオを自由に視聴できるようにする。ビデオの様子から、子供たちは、材料や焼き方の工夫に目を向けたり、実際に取材に行き確かめたりすると考える。地域のお好み焼き店には事前に連絡を取り、学習の内容や子供たちの取材の目的をあらかじめ説明し、理解、協力を得られるように支援する。

作り上げた蜷川焼きは、デジタルカメラで撮影し、自分たちの工夫を書き加えて印刷したりするなど、自分たちの調べたことを相手に伝えるようにまとめ表現する力が高まることを期待する。

グループ活動で人と人とのかかわりが生まれる

子供たちにとって、お好み焼きを食べる経験はしばしばあるが、自分で作る経験はさほど多いとは言えない。そこで、自分が考える「世界一おいしい蜷川焼き」をつくるにあたっては、「具をたくさん入れておいしくしたい」「焼き方に気をつけておいしくしたい」など、子供たちの願いに合わせてグループを編成する。

似たような願いをもっているとはいえ、子供の思いは一人一人に違いがあるため、作っていく過程では、なかなか意見がかみ合わず葛藤する場面が見られるだろう。よりおいしい「蜷川焼き」を目指して相談し合うことで、互いの心を絡み合わせ、友達の考えを理解しようとする姿が見られることを期待する。

## (2) 単元の仮説

ア 蜷川焼きを題材に、自分がおいしいと考える作り方を工夫する活動を通して、一人一人が自分の思いを明らかにしながら、主体的に学習に取り組むことができる。

イ 調査活動や材料集めの過程で、グループの友達をはじめ、家族や地域の人々とかかわり合う場を設定することによって、自分たちが多くの人々とかかわりながら生活していることに気付くことができる。

## 5 児童の実態

子供たちは、2年生の生活科で地域探検を経験している。地域の中から、自分が行きたい「すてき」な場所を選び、そこに何があるかを調べて、実際にその場所に探検に出かけた。活動の中で子供たちは、初めて間近に見る馬に人参を与える感動を覚えたり、探検の途中に地域の人々に声をかけていただいたりと、様々な新発見、初体験をし、友達や地域とのかかわりを見いだすことができた。3年生になった子供たちは、体験的な活動に対しては、喜々として取り組み、意欲的に活動できる。しかし、自分の思いが強く意欲がありすぎるばかりに、自己主張するばかりで、相手の気持ちを思いやって譲り合うことがなかなかできない姿もしばしば見られる。中学年に入った子供たちにとって、仲間とのかかわりを考えることは、社会性を身につけていく上で大切なことだと考える。

2年生の「にながわ探検」は、学校と目的地を点と点で結ぶ活動であり、そこで触れる地域や人々は限られた存在であった。3年生では、自分たちの知りたいことを解決するために、地域内の目的の場所を探し、取材に出かけることで、地域の面的な広がりを感じ、そこに住む様々な人々の営みに触れることができると考える。この学習を通して、自分たちのくらしが地域の多くの人々に支えられて成り立っていることに気付き、地域の一員として、地域に愛着をもった子供として成長していくことを期待する。

3年生になり初めて理科、社会の教科書を手にした子供たちは、意欲的に学習に取り組んでいる。理科では、カイコを育てる学習に取り組んでいる。はじめは熱心にえさをやっていた子供たちであったが、毎日欠かさず新しいえさを補充しなければならないことに困難を感じ、次第に世話をしなくなる子供の姿も見られた。

このように、子供たちは、関心をもったことについて、初めのうちは意欲的に取り組むが、意欲が持続できなかつたり、少々の困難に出会うとすぐにあきらめてしまつたりする傾向が強いので、ねばり強く取り組むことができるよう、興味、関心を高める支援を心がけたい。

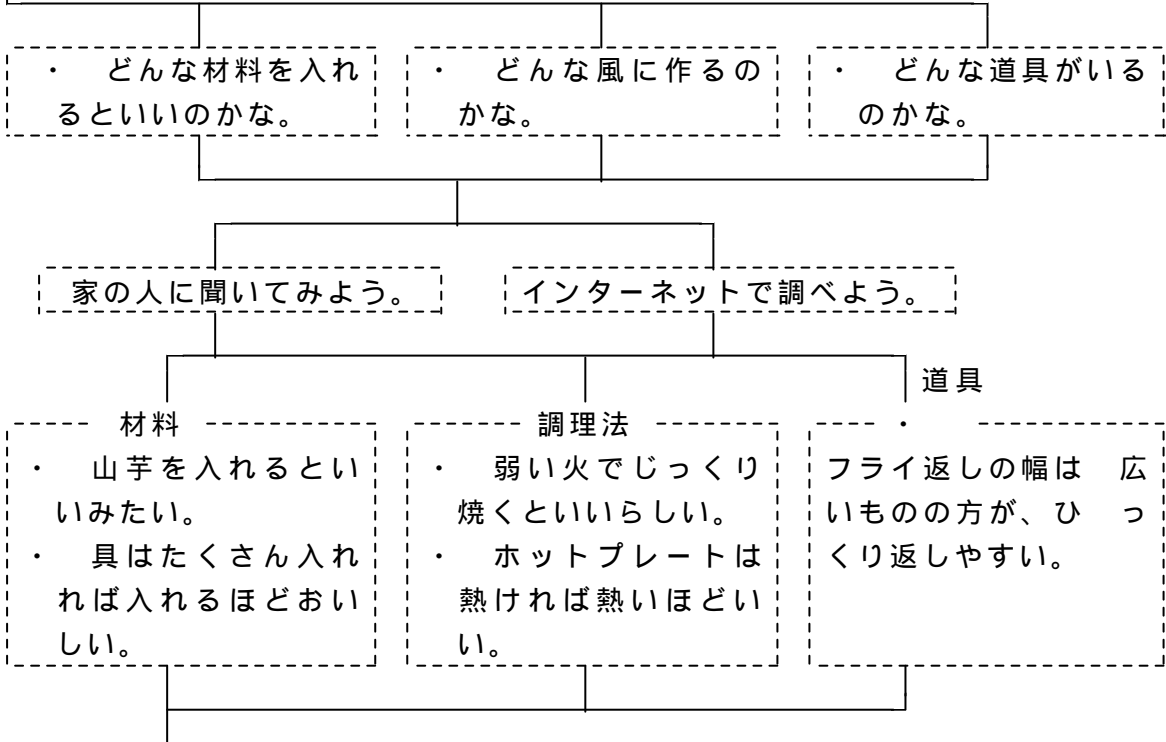
6 全体計画（18時間）

世界一おいしい蜷川焼きをつくらう

先生が作ったお好み焼きを食べてみよう。

もうちょっと食べてみたいな。  
自分でも作ってみたいな。  
どうやって作るんだろう。調べてみたいな。

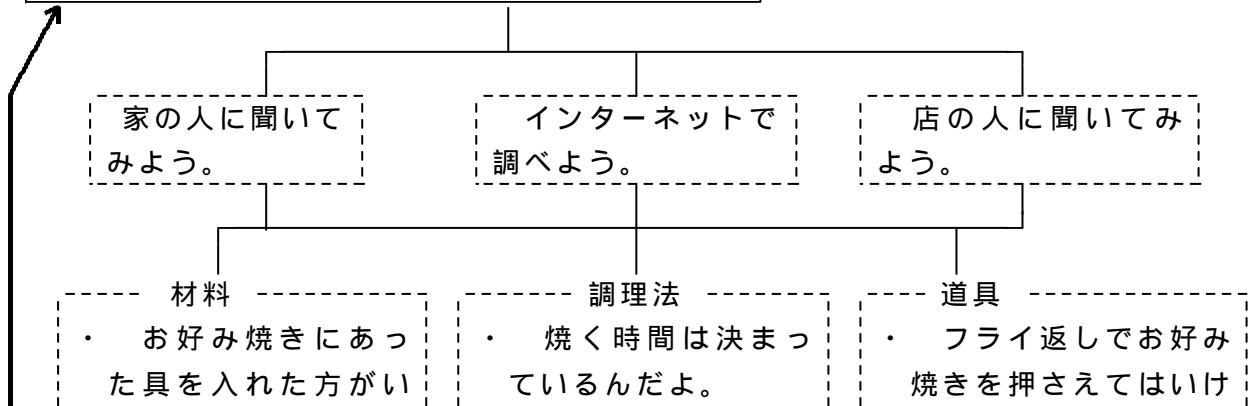
おいしいお好み焼きを作る計画を立てよう。



計画した通りに調理してみよう。

ぱさぱさしていておいしくないなあ。野菜をもう少し入れるといいなあ。  
ミスターのお好み焼きの方がおいしかったよ。  
どうしたら、もっとおいしいお好み焼きが作れるのかな。  
もっと材料を工夫したらいいのかな。  
焼き方を工夫するといいのかな。

世界一おいしい蜷川焼きをつくる計画を立てよう。



いな。  
・ もっと具をたくさん入れたいな。  
・ 材料はあまらせてくれないな。

・ 材料はあまりかきまぜない方がいいんだよ。

ないんだよ。  
・ 後片付けをきちんとするといいよ。

世界一おいしい蛸川焼きを作ろう

できあがった蛸川焼きを味わってみよう . . . . . (本時)

- ・ かりっと焼き上がるよう工夫したよ。
- ・ 具を少なくして、ごちゃごちゃした味ではない「蛸川焼き」にしたよ。
- ・ さんは具と生地のを工夫したらいいと言っていたよ。

世界一おいしい蛸川焼きを世界中の人に紹介しよう

家の人や、ふれあい活動でお世話になったお年寄りに食べてもらいたいな。

ホームページで紹介したいな。世界中の人に見てほしいな。

お好み焼きではなくて、クレープの蛸川焼きを工夫したいな。